

青年海外協力隊 OB 会会長賞  
北海道留辺蘂高校  
3年 十亀 遥

## 日本の私から見た世界

日本の私から見ると世の中にはボロボロな服を着ている人もいれば、服を買うことができない人もいる。みどりの野菜は手が入らないので食べることができない人もいる。イモや豆、とうきびが中心の食生活で栄養が偏り死んでしまう子どももいる。ボロボロの小屋のような場所に住んでいる人もいる。そのような家が密集しボコボコの汚い道のあることが普通だと思っている国がある。そして、トイレには鍵がかけられ使うだけでお金がかかっている国もある。その国では、お金のない人たちはトイレを使うことができずにそこら辺で用を足すしかないのだ。そういった国は気温が高いことが多く、雨の日などはじめじめしている。そのじめじめした空気に臭さが加わり汚い道ができていくのだと思う。この状況は日本人にとってトイレでご飯を食べるのと同じことで絶対あり得ないことだ。そういった私達日本人から見ると、住みやすい環境とは思えない国が世界にはたくさんある。私達にとってそういった国は貧しい国だ。同じような認識をもつ日本人はたくさんいると思う。

私たちは、貧しい国々には裕福な国からの支援ボランティアが必要だと考える。ボランティアは困っている人を助けるとても良い活動だ。しかし、ボランティアを受ける側は必ずしもボランティアを受けることによって、幸せと感じているとは限らない。なぜなら、ボランティアを受ける人達の意見でボランティアはされているわけではない。ボランティアをする側が自分の理想だけで良かれと思ってしているからだ。例えば、ボコボコの汚い道を日本人が環境に悪く改善した方が良くと考えコンクリートで道を作る作業を行っても、日本人のいるうちは汚くなることはない。しかし、日本人がいなくなってしまうたらどうだろうか。コンクリートの存在意義を理解する人がいなくなった時にはもとの道路に戻ってしまう。つまり、日本人がよかれと思って自分の思った理想だけで支援しても、その現地の人たちの意識を変えなければその場所の環境は変わらないと思う。ボランティアは人のためにするものだが、ボランティアを受ける相手が必要を感じなければボランティアにはならないと思う。良かれと思ってやっていることが相手の側からしたら必要と感じていないこともある。ボランティアを実行する前に相手が本当に必要としていることは何か、相手を幸せにさせることは何かを考えることがボランティアにとって一番大切なことだと思う。

私は将来教員になりたいと思っている。そこで自主的に歳の違う人、外国人、様々な人と関わっている。そのなかで、楽しいこと・辛いことから多くの新しいことを発見し、自分の経験を生徒に伝えられるようになりたいと思っている。私自身、先生や大人から聞く話は興味を持って聞く。それは私よりもずっと長く人生を経験していて、私の知らないことをたくさん知っているからだ。また、そういった話の中には新しい発見がたくさんあり、発見できたことによって自分は成長することができた。これから関わる子どもたちにも私と同じ経験をしてほしいと考えている。

今回私は、世界のボランティアの話を知り、世界の様々な国によつての幸せは私達日本人の幸せと同じではないということを知ることができた。この発見を私が教師になり早い段階で子ども達に伝えることができたなら、その子ども達はボランティアに対しても、世界に対しても、より広い見方で見ることが出来ると思う。未来に伝えるために、私自身が豊かな経験を増やすことがいま私がしたいことで出来ることだ。そのためにもいま、私は多くのことを経験し、多くの子ども達の心に響くように伝えられる力を身に付けていきたいと思う。

(原文のまま)